

カミュの原点

——西欧の辺境——

序

小論はアルベール・カミュの幼少年期を生誕から小学校時代までに限定して扱う。単なる年代記的都合からこうするのではない。カミュがまだ自分の問題を意識化する以前、いわばカミュの与件を明確にしたいからである。

既にこの与件はカミュの特異な立場を示す。彼は様々な意味で西欧の辺境の刻印を押されている。辺境から中心へ、この条件は初めから中心に育った西欧知識人とは異なった特質を彼の生・思想に与えることが予想される。

ところで、この中心への旅立ち、様々な問題の自覚が始まるのはリセ時代からである。それは全く新しい一章となるであろう。

いずれにせよ、幼少年期が個人の生涯において重要な意味を持

石井忠厚

つことは、改めてフロイトを持ち出すまでもない。人はどこに生れるか自分で決定することは出来ない。気づいてみたらそこへと投げ出されているのである。そしてしばらくはそこにとどまらざるを得ない。これが幼少年期というものである。そしてそこから出るときにはそのしるしを否認なく刻み込まれているというわけである。

アルベール・カミュにとってのそのことは植民地の植民者の最下層に生きる人々の社会であり、父が不在で、専制的な祖母と運命に従順な母のいる家である。

カミュにどのようなしが押されたか、ぼくたちは社会のしるしと家のしるしとに便宜上分けて調べてみることにする。

一、社会のしるし

カミュが育った社会の特色はおよそ次の三つにまとめることができる。

- a、征服者の社会
- b、貧しい社会
- c、伝統のない社会

それぞれについて簡単に説明しておくことにする。

a

アルベールは一九一三年一月七日、アルジェリアのコンスタンティヌ県モンドヴィ近郊のサン・ポール農園に生まれた。父リュシアンが自分の勤めていたワイン輸出の大手企業リコム社から現地農園に駐在社員として派遣されていた関係である。

アルジェリアは、もちろん、当時フランスの植民地であった。フランスのアルジェリア植民地化は、原住民の部族抗争が続く

無政府状態につけ込んで、一八三〇年七月にアルジェを占領したことに始まる。以後、征服地の拡大を度重なる原住民の抵抗を排しながら続け、一八七一年には全土を征服し、一九〇五年に至って終にアルジェリア支配が完成した。

ロットマンの調査によつて判明したところによると、アルジェ

リア初代のカミュはアルベールの曾祖父のクロードであった。彼はフランス人の入植が始まった極く初期、一八三〇年代にポルド

ーからアルジェ近郊の農村に移住した。本国では貧しく土地を持つていなかったらしい。それゆえ「一旗あげることをもくろんで地中海を渡ったわけである。

クロードの野心は実を結んだのだろうか。息子バティストは父の後を継いで農夫となったものの、四四才（一八八六年）で死ぬ。その後一家は離散の憂き目を見ている。二人の娘は女中奉公に、上の二人の息子は母方の伯母のところに、そしてアルベールの父リュシアンに至つては孤児院に預けられている。これから推すとカミュ一族は成功者とは言い難い。

とはいへ、彼らが原住民にとつては侵略者の仲間であるという事実が消えるわけではない。

b

リュシアン・カミュはブドウ園の農業労働者見習いとして履歴を始めたが、妻のカトリーヌ・サンテスの兄弟の紹介でリコム社に勤め口を見出したらしい。⁽³⁾

アルベールの出生届の際、リュシアンは職業欄に「地下貯蔵庫係」と記した。ちなみに妻のそれには「主婦」と書いた。⁽⁴⁾ 共稼ぎではないから、相対的には安定した生活を送っていたものと思われる。しかし不運なことに第一次大戦が勃発した。リュシアンは召集され、マルヌの戦場において砲弾の破片で頭に負傷し、それがもとで一九一四年一月一日（まもなく三十才になるところ。アルベールは生後十一ヶ月）、軍の病院で死んだ。

夫を戦場に送り出すと、妻はアルベールと彼より四才年長の兄を連れて、実家に身を寄せる。そして一時的のつもりが、夫の戦死によって永続的となる。

実家はアルジェ東部の労働者街ベルクール地区リヨン街にあり、そこには母方の祖母と叔父がいた。

カミュの回想の筆を借りて住居の雰囲気を再現してみよう。

《ほくはある貧しい地区で暮らしたひとりの子供のことを思うのだ。あの町、あの家！ たった二階しもなく「アパートの建物全体のこと。住居は二階の二部屋。なお周囲の建物は三階ないし四階建。》階段には燈火がなかった。……彼の手は階段の手すりに対して本能的な恐怖を覚えていて、それに一度も打ち勝ったことはない。そしてそれは油虫のせいだった。》

一家五人の生計は樽職人の叔父と、初め弾薬工場で働き、以後ずっと通いの家政婦をしていた母によって支えられていた。従って家内を取りしきっていたのは祖母である。

ベルクール地区全体が貧しいのに、その中でもとりわけ貧しい一家だったようである。

c

「伝統のない」社会とは言い過ぎかもしれない。

カミュ一族にはナシヨナリズムがあった。アルベールの記憶、従って一家の伝承によると、アルジェリア初代のカミュは祖父バティストということになっていた。その上、アルザス出身だとい

うことに。彼は一八七一年、普仏戦争による敗北の結果、ドイツにアルザス地方が割譲されることになった時、ドイツ人になるとを嫌い、あくまでもフランス人にとどまるためにアルジェリアに移住したのだとされている。

また、母方の一族はその姓からわかるように、スペイン系であった。そしてアルベールは後に、自分の中に流れている「カステリアア氣質」を問題にするであろう。

アルジェリアの植民者の出自はフランスやスペインに限られていない。彼らはイタリアその他の国々からもやって来た。そして彼らはそれぞれ自国の伝統を何がしかの支えとしたことだろう。

だが、カミュリサンテス一族のような、植民地の底辺にいる人々が西欧文化の最も良質な伝統を継承したとは言い難い。一族のほとんど全員が文盲である。例外はアルベールの父リュシアンと母方の叔母アントワネットの嫁いだギユスターヴ・アコーの二人ぐらいである。

リュシアンは皮肉なことに孤児院で読み書きを学んだのであった。しかし、彼は次男とは終に交渉を持つことなくこの世を去って行く。

アコーはリヨン出の、かつては無政府主義の闘士であったという人物。彼は独学者であるとはいえ大変な読書家であった。午前中は商売に打ち込むが、午後は図書館や本屋を廻り、カフェで議論に熱中するのが常だったという。

この義理の叔父は裕福であったという点でも例外である。《ほ

くが叔父の家に行ったときに(気づいた)本質的な違い。ぼくの
家では物は名前を持っていなかった。深いお皿とか、暖炉の上の
ポットとか言つてすませていた。叔父の所では、ウォージュの陶
器とかカンベルのセットと言⁽⁸⁾うとカミュは二十代の終り頃回想
している。

しかし、アコーとアルベールの関係が重要となるのは早くて甥
のリセ進学が問題となる頃、実質的にはリセ入學以降である。

「教養」がないという意味で「伝統」と切り離されている社会、
これもまたカミュ少年が最初に知つた社会の一面である。

*

以上、三つの特色を持つ社会のしるしはカミュにどのよう⁽⁹⁾に刻
印されたのだろうか。これを考察する際に重要なのは、ぼくたち
がこれらの特色をどう解するかということよりもこの社会を現に
生きていた人々がそれらをどう受け止めていたか、という視点か
ら出発することである。なぜなら、ぼくたちが外から捉えた社会
の姿とそれを生きている人々のそれとの間にはずれが存在し得る
からである。そして幼児あるいは少年にとつてももちろんぼくたち
の視点よりベルクルの人々、とりわけ家人のそのの方が決定的
である。この基本的事実を確認した上で、叙述の都合をも考慮し、
以下b、a、cの順にカミュに刻印された社会のしるしを見てい
くことにする。

b

まず、問題となるのは貧しさはそのまゝ惨めさだったか、とい
う点である。

大部分のカミュの研究者は当然そうだったと考えている。

一例を挙げることにする。ぼくたちの見るところ、極めて優れ
たカミュの評伝を書いた西永良成氏の場合である。

《彼は幼年時代の貧しく、辛い体験について決して生の形で語
つたことはない。自己の貧困について語らねばならなくなったと
きには、必ず貧困から得た無関心とか怨恨への嫌悪といった肯定
的な教訓とともにであつて、決して貧困のもたらす辛さや惨めさ
そのものをじかに語つたわけではない。》⁽⁹⁾

カミュの幼少年期の語り方の指摘そのものとしては多分その通
りだろう。先に引用した文における二部屋での五人の生活、燈火
のない廊下、油虫(ゴキブリ)への恐怖などをカミュ流の惨めさ
の告白と解しない限り。だが、問題なのは、貧しさ≡惨めさを当
然のこととする、西永氏の立場である。

氏の前提しているように、果して《貧しいということは辛い、
惨めなことである》は、無条件に妥当する普遍的な命題なのであ
らうか。あるいはそれと密接に関連する《豊かさは幸福の必要条
件である》という命題は。

これらの命題が説得力を持つに至つたのは、実は、西欧近代化
以降のことである。しかも西欧及び西欧化された国々のとりわけ
中産階級によつて支持されているという性格を持つ。ところで、

研究者はたいして中産階級である。ぼくたちは階級的先入見に用心しつゝ、ベルクルの人々は貧しさⅡ惨めさの等式をどう受けとめたのか、という問から改めて始めることにしよう。

確かに彼らも野心家のなれの果て、もしくは野心家の子孫であった限り、貧しさⅡ惨めさという等式を正面から否定する根拠を持っていない。しかし、逆に、この等式の全面的肯定は自分の不幸の持続的意識である。これは、自己否定、破滅への道であろう。この道を選んだ人々もいたことは間違いない。だが、ぼくたちの相手どるベルクルの人々は、それでも生活を営み続けている。なにゆえ、生活の持続は可能であったのか。これこそベルクルの人々が貧しさをどう解したのかという問題への根本的鍵を開示する問である。

ア・プリオリに三つの可能性が考えられる。

①個人的に貧困からの脱出を期待しつゝ現在に耐えている。
②貧困を個人の問題からではなく社会の不正、歪として把握しつゝ、階級闘争Ⅱ社会改革において、抜本的解決を待望する。

③貧困Ⅱ惨めさを否定できないなら、この等式を忘却し、貧困という事実あるいは条件の範囲内で幸福を追求する。

多分、ベルクルの人々は破滅者ではなく生活者の道を選んだ限りにおいてこれら三つの可能性のいずれか一つに、あるいは複数に、あるいは全てに己れを託したのであろう。

しかし①のみ、あるいは②のみに賭けた人々は極く少数にとどまったにちがいない。①は過去の実例によって、その夢の実現性

の困難を思い知らされていたから。②は社会的知性的把握を前提とするが、知性、というよりその訓練の最も欠けているのが、ベルクル的特色だから。

結局、ベルクルの大部分の人々を選んだのは③だったと思われる。

そして③の道を選んだ人々の幸福、すなわち貧しさの中の幸福を見事に伝えるカミュの回想文がある。

《夏の夕べ、労働者たちは露台に出て来る。彼の家には極く小さな窓しかなかった。それで家の前に椅子を降してきて、夕べを味わったものだ。通りがあつて、脇にはアイス・クリームの売り子がいいて、向いには数軒のカフェがあり、子供たちの喧騒が戸口から戸口へかけ巡っていた。だが、とりわけ大きなイチジクの樹々の間に空があつた。貧しさの内にはある種の孤独があつた。しかしその孤独はあらゆる事物にその価値を促す。豊かさがある段階に達すると、空そのものや星に満ちた夜も当然の財産のように見える。しかし最下層階級では、空はそのあらゆる意味を取り戻すのだ。代償のない恩寵！夏の夜、星のまたたく神秘！その子供の背後には悪臭を放つ廊下があり、彼の小さな椅子は、布が破れていて、彼の重みで少し沈んでいた。だが彼は両眼をあげて、
浄らかな夜をじかに飲み干すのだ⁽¹⁰⁾》。

もちろん、幸福への意志は常に成就されるとは限らない。貧しさは幸福の条件ではなく、幸福への出発点に過ぎないからである。それゆえ、貧しさはそれ特有の幸福と不幸をもたらすと言うべき

であろう。ただ、貧しさ特有の幸福は自然、むしろその恩恵への独自の感受性を養ったという事実は強調されるべきである。そしてこの感受性と共に近代西欧の価値観に疑問符を付する可能性を生じたという事実も。

しかし、貧しさを一個の事実として受容し、その上に生活を設計するという姿勢は、常に貧しさ¹¹惨めさという既製の、そして貧しい人々も基本的には認めている、視点との相克なしには維持することが出来ない。

ベルクルの人々の、このような視点に対する、基本的戦略は忘却、意識にのぼらせないことである。そしてその態度を貫くための知恵と工夫は極力、上の階層の人々との接触を回避することであった。

貧しさ¹²惨めさの意識の覚醒は単なる豊かさとの対比によって惹き起こされるわけではない。ベルクルにも、アルベールの叔父アコーのように相対的には豊かな生活を送っている人々もいたのである。しかし幼い甥の目にその生活は単に自分たちとは異なるそれとしか映らず、精々その事実による驚きを惹き起したに過ぎない。アコーが「仲間」だったからである。真の脅威は上の階層の人々のまなざし、貧しさ¹³惨めさを全面的に肯定した上でのさげすみ、いやそれ以上に憐みのまなざしにあった。

カミュ一族の大伯父はアルベールのリセ進学に頑強に反対したという。⁽¹¹⁾上の連中とのひんばんな接触によって少年が屈辱を蒙ること、そして更にそのことを通して、自分たちの「忘却」が脅か

されることを怖れたからに他ならない。

一般に貧しい人々の知恵の要諦はあたかも世界全体が貧しいかのように、あるいはベルクルがそれだけで完結した世界であるかのように生きること、この自己偽瞞の工夫にあったと言えよう。

しかし、そのような工夫すら必要としない例外的な人々もいなかったわけでない。アルベールの母親もそのひとりであった。

彼女は自己偽瞞なしに貧しさ¹⁴惨めさの視点を「超越」していた。彼女は何らかの自己鍛練の末「超越」に達したわけではない。この文盲で、病弱で、耳の遠い女性は労働の疲労のせいのみならず、その《薄弱な精神》のゆえに《ほとんど考えること》をしなかったからである。⁽¹²⁾彼女には「現在」しかなく、それゆえにこそ貧しさをも含めて全てを運命として受容できたのである。これはアルベールにとっては、対「貧しさ」ということに限って言えば幸運なことであった。《こうした幸せな免疫性の功績は私に帰しはしない。私はそれを何よりも私の家族に負うている》と後年彼が記すとき、そこには誇張はない。彼は貧しさの味、その辛・不幸の味を、富こそ一切の尺度とする近代西欧の価値観からは独立にそのまま素直に味わえるというまことに得難い機会に恵まれたのであった。

カミュは、リセに進学したとき、一族の長老の子見どおり、「屈辱」、貧しさ¹⁵惨めさの押しつけ、を体験する。そのとき彼の反抗の基盤となったのはグルニエによって開示された知的超越の探索と共に、一定の尺度によって測られる以前の、この原始的

貧困の体験であった。

カミユが貧困に惨めさをなまの形で語らなかつたのは、決して美化や羞恥心のためではない。彼は西欧近代以前、そして西欧化されていぬ地域では極く当り前の、《貧しいことは必ずしも惨めなことではない》、という事実を伝えたに過ぎない。

次に、貧しい人々は同時に征服者もしくはその子孫でもあった事実を取り上げよう。要するに對アラブ人意識が問題である。

研究者たちは概してベルクルの人々は、アラブ人に友好的である、更には仲間意識を有していた、という見解に傾いている。

例えば、白井浩司氏は言う。《・・・カミユはアルジェに居住するフランス人社会の恐らくは最下層に属していた。現住民に威張り散らすコロンと呼ばれる搾取者と同じ心理を持つことはできず、従って政治的には被圧迫者だったアルジェリアの民衆とほとんど同じ意識を所有してはいたのではないだろうか。》⁽¹⁴⁾

P・ソディはアルベルとその兄リュシアンが叔父エチエンヌの勤めていた中庭で一群の労働者たちと共に撮った写真にアラブ人も写っていたことから結論する。《これらの労働者たちは人種的偏見から完全に解放されている》⁽¹⁵⁾と。

この写真から始めよう。

アルベル兄弟を中心に二列の人々。前列は腰掛け、後列は立っている。そしてアラブ人は前列の右端にいる。彼は何ゆえ後列

の立っている人々の間に混っていないのか。前列の右から二番目、あるいは左から二番目にいないのか。何か目に見えない線がこのアラブ人を他の人々から切り離しているかのようである。

一方では、確かに、アラブ人は厚遇されているかのようである。彼は前列で腰掛けているのだから。他方では、排除されているようでもある。右端に押しやられているのだから。

この写真が示す、二重相は、面白いことに、ロットマンが報告する事実と符号するのである。

《ベルクルに住むヨーロッパ人たちは、ほとんど皆、回教徒たちと仲良く共存していたと回想している。隣り合って、あるいは隣接地区に住んでいたヨーロッパ人と回教徒はしばしば同じ小学校に通っていた。カミユの昔の級友が五十五年ぐら以後に回想したところによれば、クラスの生徒の約三分の一は回教徒だった。》⁽¹⁶⁾

しかし、ロットマンの調査によれば一九三二―三四年の中級科二年の学級名簿には三十人中、アラブ系の名前は一つか二つしかないという。⁽¹⁷⁾

回想の誇張と「前列に腰掛けているアラブ人」、事実の貧弱と「右端に押しやられているアラブ人」は見事に対応する。

表面的厚遇と実質的敬遠。ベルクルの人々は自分たちが思い込みにあっているほどアラブ人に対して友好的ではないのである。意識と行動のずれ、これはどこから来ているのだろうか。それを解く鍵はロットマンの報告の中に秘められている。

《ある教師がこう言ったことがあった。「テウフィクの宿題を見てみなさい。君よりよく出来ています。アラブ人なんですよ。彼は！》⁽¹⁸⁾》。

教師のこの指摘は生徒たちの、従って親たちのアラブ人への差別意識を前提としてのみ説得的である。

ベルクルルの人々は確かにアラブ人への優越意識を有している。しかし、アラブ人に対する友好のジエスチュアはこの意識が表面に出てくることを避けようとする意志の存在を示す。

何ゆえの意志か。

二つの理由が考えられる。

一方では、貧しさ \parallel 惨めさの意識からの逃避の努力がこの意志を不可避にする。あの努力は上の階層との比較を回避することを要請した。それゆえ下の階層、この場合、被征服者でもあり、より貧しい人々でもあるアラブ人との比較も回避されねばならない。上の階層に対して閉ざされたベルクルルの社会は下に対しても閉ざされねばならない。このようにしてのみベルクルルの社会 \parallel 偽似完結体は維持されるだろう。表面的友好は実質的無関心に通じている。

しかし、それだけではない。優越意識あるいは閉鎖 \parallel 排外意識のあらわな表現は、アラブ人の敵意を目覚めさせるであろう。

ベルクルルの社会といえど、フランス植民地の一部である以上、その存立、そこでの平和な日常生活は武力によって、軍隊によって辛うじて保たれているに過ぎない。アラブ人は双手を挙げて北

方の白い客人を歓迎したわけではない。力に屈して強盗を客のよりに扱っているに過ぎない。

アラブ人側の潜在的敵意とフランス人側の潜在的恐怖、これが後者の前者に対する過剰な友好の身ぶりを産み出すもう一つの理由である。

フランス人植民者の感じている潜在的脅威はアメリカ西部の開拓民の対インディアン意識以上のものがある。ヨーロッパ系植民者百万に対してアラブ人約一千万、一対十の人口比である。都市部ではこの比率はもう少し緩和されるとしても。

無視したいが無視できない他者、それがベルクルルの人々にとつてのアラブ人である。いずれにせよ、見かけとは裏腹に、彼らとアラブ人の間には真の友情、感情の共鳴はない。

それゆえ、カミュに刻印されたのも、先ずアラブ人に対する冷淡さである。

カミュはアラブ人に取り囲まれた社会で青年時代まで過すという、ある意味では西欧知識人にとっては大きな幸運に恵まれたにもかかわらず、生涯を通じて、イスラム文明に、単なるエグゾテイスムを越えた、本質的関心を有したことは一度もない。彼は確かに西欧文明に対して独特な観点から接しはした。しかし、西欧文明 \parallel 文明という等式からは自由にはなれなかったのである。西欧文明の辺境は、必ずしも文明の辺境ではなかったにもかかわらず。

カミュを弁護する人は、あるいは言うかもしれない。彼は後に

アラブ人への差別政策を批判し、それに抗議したと。しかし、それは貧しさは社会の不正によるという思想から出発し、われわれも貧しければ彼らも貧しい、という観念的連帯意識に立脚したものに過ぎず、感情的連帯感に基づくものではなかった。それゆえ、貧しいフランス人といえど自分たちにとっては侵略者であることには変りない、というアラブ人の苦々しい思いを彼は終に汲みとることなく終る。彼の認識はアラブ人の中にフランス人がいるというのが当り前という表層的事実を越えることはなかった。アルジェリア独立戦争の際の、カミュのとまどいはここに由来する。

カミュの征服者⇨加害者意識の欠如は、あるいはアラブ人に対する「潜在的恐怖」の顕在化、意識化によって埋め合わせる道が開かれたかもしれない。しかし、事実は潜在的なまゝにこの恐怖感がカミュに植え込まれるという結果に終わったようである。

その事情は、『異邦人』に見ることが出来る。この作品は、周知のようにフランス人の青年ムルソーが一アラブ人を殺害した物語である。青年は結局、死刑の判決を取ける。殺人は、その対象が何人であれ、公平にその罪が問われるわけである。作者は、その意味で人種的差別などないことを当然のこととしてこの小説を組み立てた。

にもかゝらず、その殺人の動機が問題となるときに、作者は人種の偏見を暴露しているように思われる。

作者の計算では、主人公ムルソーの告白通り、殺人は『太陽のせい』、不条理な動機によってなされるべきであった。しかし、

読者の受けとめ方は違う。これは条理ある動機による殺人として受け止めてしまうのである。というのも殺された人間を含めて、この作品では、アラブ人たちは何か不可解で無気味な他者として描かれ、読者はそれと共に潜在的な恐怖感を抱かされていたからである。

カミュ自身が自覚していない何かがかゝるではからずも露呈してしまつたと言ふべきである。

ぼくたちは、ソディの取り上げた写真、ロットマンの報告に見たアラブ人の取り扱ひの二重相の再現をこゝに見る思いがする。建前としての平等、本音における他者。

カミュは対アラブ人意識においてはベルクルの人々のそれを本質的には一步も越え出ることとは出来なかつたように思う。

カミュに刻印されたのは、アラブ人に対する潜在的恐怖感を伴う無関心に要約される。後に知性によってこの無関心の克服は試みられるが、貧しさ⇨社会の不正という意識に裏打ちされた部分だけが埋められたに過ぎないから。

最後に、伝統のない、この社会がカミュに刻印したものを問題にする。

この社会はカミュの幼年期において百年はまだ経ていない。古い都市、先祖代々の農村という伝統的基盤を欠いていた。彼らより古い歴史を有するアラブ人社会とは文化的に隔離されていたか

ら、その伝統は彼らとは無関係である。彼らには教養がなかったから、彼らの上の階層のように知性を介しての西欧の伝統的文化との接触もほとんど問題にはならなかった。

しかし、偽似的には完結し、独立しているこの社会は、それがゆえに、素朴で直接的な倫理を築き上げることに成功した。多分、西部劇で示されるモラルにも似た。

カミュ自身の言葉でこれを要約しよう。

《・・・これらの人々に原則が欠けているということではない。人々は自分のモラルを有している。まことに特殊な。母親に〈背いたり〉はしない。街頭では自分の妻を敬わせる。妊婦には敬意を払う。一人の敵に二人で飛びかかることはしない。〈それは汚ない〉からだ。これら基本的掟を守らない者に対しては、〈奴は男ではない〉、それで片がつく。こうしたことはぼくには正しいし、しっかりとしているように思える。》⁽¹⁹⁾

最後の結論通り、カミュはこのモラルを肯定し、自分の肉体にまで刻みつける。もちろん、彼はこれに知的洗練を加えていく。しかし、その知的外皮の下に、いつも庶民的で、そのくせ、何か気高いものを秘めている、このモラルが見出される。『ベスト』のインテリたちの心打つ行為も、多分、生れながらの知識人には欠けている、このモラルに裏打ちされているのである。

だが、『ベスト』の感動は、同時にこのモラルの有効範囲の限界をも伴っている。

『ベスト』の社会はベストによって閉鎖され、同質化された社

会である。結果的には、ベルクルの人々によって虚構された社会に近い。ベスト退去後の社会、階層化され、構造化された社会にもなおベルクル的モラルは通用するのであろうか。

カミュの悲劇の一つは《奴は男じゃない》、もう少し洗練された《それは人間的ではない》では片がつかない状況に巻き込まれ、その中で、あくまでもこの素朴さを守り抜こうとしたところにある。彼は思想や政治的立場の方が友情より優先されることもあり得るという現実到最后まで途方に暮れたままであろう。

*

様々な結果をカミュにもたらした社会のしるしは、要するに偽似完結的、そして同質的社会的存在への彼の信仰に帰着する。彼にとつてはそのような社会は確かにかつて存在したのだし、その祖型と異なる社会の現実が、そこへ回帰する必要性を彼にますます痛感させることになっただけである。彼の魅力はそのユートピア的幻想とそれを支えるいくつかの根本体験にあり、その欠陥は現実の認識不足にある。しかし、現実の認識の充実が果して幻想の魅力を否定する力を有しているのかどうか、それが問題である。いずれにせよ、カミュのしるしを、従つてその幻想の原動力を社会にのみ帰することは出来ない。家のしるしが問題であり、それを通してのみ社会のしるしは有意義化されよう。

一、家のしるし

カミュの育った家庭の最も顕著な特色、それは母子間に愛の表現が欠如していることにある。

母は子を「愛撫」することを一度もしたことはなかった。というのも彼女はそうすることを知らなかったからである。⁽²⁰⁾子供の方も母親の「この動物のような沈黙の前に」⁽²¹⁾なすすべがない。

だが、母の子への愛は直接的に表現されることはなかったが、確かに存在した。常に柔順な彼女が怖い家庭内の暴君、祖母に子供のためには反抗することを辞さなかったからだ。

「彼女の母親は子供たちを鞭で教育する。彼女が強く打ち過ぎると、その娘は言う。『頭は叩かないでくださいね』と」⁽²²⁾
アルベールの母への愛は存在したのだろうか。これも確かに。しかし彼がそれを知るのは極めて苛酷な状況においてである。

「老女は訪問客があるのを待っていたが、それは孫をじつと見つめてこう尋ねるためだった。『どちらが好き、お母さんかい、お祖母さんかい？』この戯れは娘が居合わせるときには厄介なものになった。なぜなら、いかなる場合にも、孫は「おばあさんさ」と答えたからだ。だが、彼の心の内ではこの母親に対する大きな愛の衝動が生ずるのだった。彼女はいつも黙っていたが。」⁽²³⁾

子の母への愛の自覚は裏切りのそれと共にである。

ぼくたちはここで、キリスト教の誕生、イエスの復活神話に思

いを至らさせざるを得ない。この神話化の原動力はペテロにあった。そしてそこへと駆り立てたものこそ、聖書の「三度否認」の記事が伝える彼の裏切りの体験にあった。逮捕される以前のイエスにペテロがどのような幻想を抱いたにせよ、茨の冠をかむらされ、なぶられているイエスはイザヤ書五三章の僕の姿そのものである。

「彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病いを知っていた。」

このような人物だからこそペテロは彼を裏切り、このような人物だからこそペテロは彼を「復活」させたのである。

「僕」|| イエスの姿はそのまゝ母カトリヌのそれでもある。それゆえペテロの体験はアルベールのそれと重なり合う。

相違は、イエスは死に、母はその後も生き続けたということにしかない。カミュはリセ時代にも母を「否認」するだろう。例えば街頭で級友と共に母を見かけたときなど。一体に知識階級への道、知的世界へと彼が深入りするにつれて、母を益々裏切ることになる。母の住む世界はいよいよ遠ざかり、沈黙の壁はいよいよ厚くなるからである。だがそれにつれて母への愛、母の聖化も進行する。そして母と不可分の世界、ベルクールも聖なるものとなる。その意味で、カミュにとって幼少年期の刻印は聖痕である。逃れられない宿命ではなく、肯定すべき運命の意味を有するに至る。

- (1) Herbert R. Lottman : *Alber Camus* (Édition du Seuil, Paris, 1978; Traduit de l'américain. Par Marianne Véron), P. 21.
- (2) *ibid.*, P. 23.
- (3) *ibid.*, P. 24.
- (4) *ibid.*, P. 27.
- (5) *Œuvres complètes d'Albert Camus* III, *L'envers et l'endroit*, (Gallimard. Paris, 1983; 不レ全集卷 AC 七 雑誌) P. 131.
- (6) AC V, *Actuelle* III, P. 304.
- (7) AC VII, *op. cit.* P. 112.
- (8) A. Camus, *Carnet II*, (Gallimard. Paris. 1964), P. 62.
- (9) 西永良成『評伝ノルヴェール・カミュー』(白水社、一九七六年)一八一—一九頁。
- (10) AC VII, *op. cit.*, P. 131—132.
- (11) Morvan Lebesque, *Camus par lui-même*, 《Écrivains de toujours》, (Éd. du Seuil, Paris, 1965), P. 15.
- (12) AC VII, *op. cit.*, P. 132.
- (13) *ibid.*, P. 113.
- (14) 白井浩司『ノルヴェール・カミュー その光と影』(講談社、昭和五三年)一五一—一六頁。
- (15) Philip Thody, *Albert Camus 1913—60*. (Hamish Hamilton, London, 1961), P. 4.
- (16) H. R. Lottman, *op. cit.*, P. 44—45.
- (17) *ibid.*, P. 45.
- (18) *ibid.*, P. 44.
- (19) AC VII, *Noce*, P. 188.
- (20) AC VII, *L'envers et l'endroit*, P. 133.
- (21) *ibid.*
- (22) *ibid.*, P. 132.
- (23) *ibid.*, P. 127.